

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 12 日現在

機関番号：32649

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26381099

研究課題名(和文) 授業研究を機軸とした高等学校の学校経営に関する多角的研究

研究課題名(英文) A multiple research focused upon public high school managements using the lesson study

研究代表者

高井良 健一 (TAKAIRA, KENICHI)

東京経済大学・経営学部・教授

研究者番号：50297339

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究を通して、高等学校の新任教師の専門的成長を支えるものとして、すべての子どもたちの学びを保障する授業づくりに責任をもつ専門的共同体の存在が大きくなったことが明らかになった。学校における専門的共同体は、授業研究を通して、教師たちの語り合い、聴き合い、語り直しによって、形成される。新任教師たちは、着任当初は、子どもたちの学びに対する一元的な語りが特徴であったが、授業研究会への参加を重ねるごとに、多元的な語りを身につけ、これに伴い、子どもたちとの関係も組み替えられてきた。

研究成果の概要(英文)： We have inquired how to build teachers' professional learning community in a public high school in Saitama prefecture by an action research and a narrative approach. We found that it is well organized lesson studies to assume a key role to build well teachers' professional learning community. In recent years lesson studies are held monthly in this high school. Every teacher joins in lesson studies and discusses how to support an effective and a successful learning for each student.

In particular, we have focussed upon the change and growth of three novice teachers to follow their narrations in the lesson study. At first their narrations were composed by several short sentences and fragmented knowledge. However their narrations was gradually getting long and changing into the statement of being connected other teachers' talkings. The change of narrations were related with the growth of their teaching and practice as a teaching profession.

研究分野：教育学

 キーワード：教師の成長 同僚性 校長のリーダーシップ 授業研究 学校文化 子どもたちの学び アイデンティティ
 ライフストーリー

1. 研究開始当初の背景

現在、先進国では、産業社会から知識社会への移行により学校教育と教師に求められる役割が変わりつつある。産業社会の段階では、モノの大量生産と流通により経済活動が行われるため、産業社会の学校では、子どもたちの学習は知識と手続きの記憶に傾斜し、教師の仕事もまた、教科の知識と手続きを子どもたちの頭の中により効率的に注入するところに重点が置かれてきた(佐藤, 1994)。ところが、知識社会の段階に入った先進国では、情報機器の多様化ならびに情報技術の複雑化が進行し、知識や人々が国境を超えて交流するグローバル化の拡大も相まって、より高度な思考とコミュニケーションが求められている。したがって、「知識社会の学校では、創造性や創意工夫を子どもたちの中に育む必要があり」(Hargreaves, 2003, p.i)、教師は、子どもたちが教科の知を深く理解しながら現実場面で転移可能な知識を獲得し「自分たちで生きた意味ある知恵や知識を新たに協働して創出し表現できること」(秋田, 2008, p.3)、さらには、生涯にわたって続く学習への責任を培うこと、といった高度な学びと成長の支援が求められている。

では、知識社会に対応した学校はいかにして構築されるのだろうか。一つのアプローチとして注目されているのが、日本の学校教育において伝統的に行われてきた「授業研究(Lesson Study)」を中核とした学校文化の生成とそれによる学校改革である(秋田・ルイス, 2008)。授業研究とは、授業の参観と実践の表象により、個々の教師の専門家としての見識や技法を高めるとともに、教師たちの同僚性を高めながら学校における協働的な文化を構築するための有効なアプローチである(e.g., Mills College Lesson Study Group, 2005)。知識社会における学校経営を構想するにあたって、授業研究は教師の省察的实践を支え、教師たちの協働的な文化を学校に生成する一つの機軸となりうるものである。日本に由来する授業研究が、1990年代以降、北米や東アジアの国々にも拡大している背景には、このような知識社会における学校経営の変革の要請がある(ルイス, 2008)。

ところで、日本の授業研究ならびにその研究には以下の2点の課題が残されている。第1に、日本の授業研究は小学校・中学校の義務教育段階で広く定着している一方で、高等学校での実施、定着率が低いという課題が挙げられる。第2に、第1の課題の帰結として、日本の授業研究に関する研究もまた小学校・中学校を主な対象としてきたという研究上の課題が挙げられる。これは、教育研究者、授業研究者の高等学校の教育に対する関心の薄さと、高等学校でのフィールドワークの困難さによるものと考えられる。本研究は、これらの課題を乗り越えて、研究の新たな地平を目指すプロジェクトとなる。

2. 研究の目的

本研究は、高等学校における授業研究への参加が新任教師たちの教科ならびに教授学的思考に関する能力の発達にどのように寄与するのか、さらには学年単位による授業研究の組織化が教師たちの同僚性の再構築にどのような影響を与えるのか、を明らかにすることによって、授業研究を基軸とした学校経営の方略について、具体的かつ多角的な事例叙述を通して問題提起することを目的とするものである。主な研究フィールドとなるのは、埼玉県のある公立高等学校である。この高等学校では、入学時の生徒たちの多くが学力面や生活面での課題を抱えている。新任教師として、このような学校に赴任することは、「学びから逃走する子どもたち」(佐藤, 2000)との対峙という厳しいイニシエーション(通過儀礼)に直面することを意味しており、容易なことではない。しかしながら、今回フィールドとした高等学校には、授業研究という教師の学び合いの装置があった。本研究では、授業研究による教育の諸関係の変容を浮き彫りにすることで、高等学校、とりわけ教育困難校の改革のための専門的共同体の構築による学校経営の可能性を提示することを試みた。

3. 研究の方法

上記の研究目的を実現するために以下のような研究の方法を用いた。

まず新任教師の授業観・学習観・アイデンティティの変容を捉えるインタビューならびにカンファレンス調査を行い、授業研究を通して新任教師が変容する過程を事細かに探究した。具体的には、学校赴任直後、一ヶ月後、一学期終了後、二学期終了後、一年後にインタビューあるいはカンファレンスを行い、ICレコーダーによって新任教師の語りを記録し、トランスクリプト化した。二年度、三年後にも、調査を行い、同じように新任教師の語りを記録し、トランスクリプト化した。また、三年後には、新任教師が自分自身の教師としての歩みを振り返ることで、これまでの教職生活の中での転機を探るといった調査を行った。

これらの調査を通して算出された新任教師たちの語りの記録(=トランスクリプト)を用いて、新任教師たちの語りの内容と様式がどのように変容したのかを明らかにした。

同時にベテラン教師が自らのライフストーリーを語り、それを歴史的、社会的文脈においてライフヒストリーとして位置づける研究を行った。ベテラン教師は教育雑誌にエッセイを綴ってきており、これらの論文、文章を高校教育政策の変容と重ねるという方法によって、ベテラン教師の経験の意味を探究した。その結果、ベテラン教師の中年期の

危機が高校教育改革によって増幅されたかたちで出現したこと、そして、新しい学校での授業研究との出会いと同僚性の再構築によって、その危機を創造的で生産的な価値に転化しえたことが示された。

4. 研究成果

本研究の成果は大きく分けて二つ挙げられる。一つ目は、新任期の教職生活のさまざまなタイミングでの新任教師の語りを通して、新任教師の変容の過程をつぶさに追うことによって、新任教師たちのアイデンティティの変容の契機と構造転換を明らかにしたことである。今回の調査の中で、ある新任教師は、2年前の自分の語りとの出会い、その語り手が「自分ではないようだ」と語っていた。つまり、2年前の自分が自分ではないと感じられるほどに、新任教師は大きな変容を経験しているのである。これまでの質的研究の多くは、新任期の研究を、振り返りのデータによって、行ってきた。これに対して、本研究では、短いタイミングで、何度も語りを聴くことによって、どの時点で、どのような出来事を通して、新任教師は変容するのか、を明らかにすることに挑戦した。思うようにならない生徒との出会いと、その葛藤場面における先輩教師からの助言が、新任教師の授業観、学習観、アイデンティティの変容につながるものが明らかになった。その変容を生み出した背景として、一人ひとりの教師の授業観、学習観が相互に交流し合う授業研究での語り合い、聴き合いが、重要な役割を担っていたことも示された。

二つ目は、ベテラン教師の教職生活におけるモチベーションの向上を支える同僚性の再構築の意義と役割が、具体的に明らかにされたことである。公教育の維持、発展のために、教師の質保証が政策的な課題となっているが、教師個人の資質の向上を中心としたアプローチには限界がある。この研究でも、自らのアイデンティティを強固に確立したことで、結果的に孤立してしまい、深い葛藤のなかにあった中年期のベテラン教師が、授業研究においてリーダーシップを担い、新任教師たちとの学び合いを経験することによって、変容を遂げるという過程が示されている。学校における同僚性の再構築、そしてそこで生み出される「専門家共同体」の構築が、教師の持続可能な専門的成長を実現することが明らかになったのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計3件)

高井良健一、岩田一正、木村優、齋藤智哉、金子奨、小島武文、高石昂、福泉志織「高等学校における授業研究がもたらす新任教師の変容」(日本教師教育学会第25回研究大会、信州大学教育学部キャンパス、2015年9月20日)

高井良健一、岩田一正、齋藤智哉「授業研究を基軸とした高等学校における新任教師の変容」(日本教師教育学会第26回研究大会、帝京大学八王子キャンパス、2016年9月18日)

金子奨、木村優「授業研究を基軸とした高等学校における専門家共同体の構築」(日本教師教育学会第26回研究大会、帝京大学八王子キャンパス、2016年9月18日)

〔図書〕(計2件)

佐藤学、浅井幸子、キャサリン・C・ルイス、高井良健一、伊藤美奈子、油布佐和子、山崎準二、牛渡淳、勝野正章『岩波講座 教育学の専門家としての教師』2016年、岩波書店。

岩田一正『グローバル時代に見られる地域社会、文化創造の様相』2016。

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者 高井良 健一
(TAKAIRA KENICHI)
東京経済大学・経営学部・教授
研究者番号：50297339

(2)研究分担者 木村 優
(KIMURA YUU)
福井大学・教育学部・准教授
研究者番号：40589313

岩田一正
(IWATA KAZUMASA)
成城大学・文芸学部・教授
研究者番号：70338573

齋藤智哉
(SAITO TOMOYA)
國學院大學・文学部・准教授
研究者番号：80570481

(3)連携研究者 なし

(4)研究協力者 金子 奨
(KANEKO SUSUMU)
小島 武文
(KOJIMA TAKEFUMI)
高石 昂
(TAKAISHI KOU)
福泉志織
(FUKUIZUMI SHIORI)
吉田友樹
(YOSHIDA TOMOKI)